

ケイシーと歩んだ日々

—— グラディス・デイビス・ターナーに聞く

☆

グラディス・デイビス・ターナー (1905-1986) は 1923 年から、エドガー・ケイシーの亡くなる 1945 年まで彼の秘書を務め、その後の人生を《ケイシー・ワーク》に捧げた。

彼女は ARE の理事会やケイシー財団、アトランティック大学と、全体の事情に通じる事務スタッフとしてだけでなく、ケイシー資料の最も重要な管理責任者として、またケイシーの活動の歴史的証人としても活躍した。

ケイシー亡きあとのリーディングの保全については全面的な信頼を寄せられている。

彼女の生涯は、マリー・エレン・カーターによって『ケイシーとともに歩んだ歳月 (My Years with Edgar Cayce)』 という伝記になっている。

エドガー・ケイシーがいつも「ミス・グラディス」と呼んでいた彼女は、アラバマ州の貧しい農夫の娘として生まれた。

16 才のときに速記者として、アラバマ州セルマにある金物製品を扱う会社で働き始めた。

18 才のとき偶然に、同じセルマにあったエドガー・ケイシーの写真館で取られたあるリーディングの速記を頼まれた。

その折ケイシーは、その速記の技術に感嘆して彼女を雇い入れた。

記録されたケイシー・リーディングのかなりの部分が、グラディス・デイビス・ターナーの速記によるものである。

ケイシー夫妻と二人の息子のケイシー家は、1925 年、バージニアビーチに引っ越しているが、その折も彼女と一緒にいた。

家族同然だったのである。

ケイシーの死後は、レミントン・ランド社によって計画された 11 年にわたるプロジェクトにスーパーバイザーとして携わり、リーディングを整理して索引をもうけ、それ以前とは比べものにならないほど大勢の人々がリーディングを利用できるようにした。

ケイシー周辺の歴史を知る者として、そしてまたたくさんのリーディングを記憶する者としての功績は大きく、長年にわたってその人柄はさまざまなエピソードとともに多くの人々に愛され、協会のみならず世界中の研究者、会員たちにとってかけがえのない存在であり続けた。

1983 年にはキャバリエ・ホテルにおいて、グラディスが《ケイシー・ワーク》に携わって 60 年が過ぎたことを記念する華やかなダンス・パーティーが催された。

会員やスタッフ、著名人など数百人の人々が世界中からお祝いにつけ、ケイシー情報を広く一般の人々が利用できるようにした彼女の業績を讃えた。

晩年にたずさわったプロジェクトの一つはケイシー情報を電子化して CD-ROM に収めることであり、彼女は資金調達の責任者でもあった。

出会う人々の心を惹きつけてやまないグラディスは、彼女自身のリーディングの一つに「・・・あらゆる障害を踏み台に変える者である・・・」と語られている。

この記事は、1984年当時、アトランティック大学の校長であり、またケイシー財団の会長だったジェームズ・O・ウィンザー博士によるインタビューをまとめたものである。

☆

ジェームズ・ウィンザー (以下 JW) : まず、エドガー・ケイシーとの出会いから伺いたいと思います。どのような経緯でお会いになったのですか？ 彼の第一印象はどうでしたか？

グラディス・デイビス・ターナー (以下 GDT) : 最初に会ったのは、速記者として彼のところで働き始める一年程前のことです。

私の妹は学校でヒュー・リン・ケイシーと同じクラスで、二人は大の仲良しでした。

それで、エドガー・ケイシーに会う前から私はヒュー・リンを知っていました。

ヒュー・リンが妹の本を持ってあげてブラブラさせながら、しょっちゅう私の家にやって来ました。

妹はケイシーさんのいる教会の日曜学校に入りました。

ヒュー・リンと一緒にでした。

ケイシーさんのクリスチャン・エンデバー・グループには、沢山の若い人たちが参加していました。

そのグループがバーミンガムの年次総会に参加することになったとき、ケイシーさん夫妻がグループを引率してくれて、私の妹も一緒に行きました。

私は妹の見送りに父と家から 3 ブロック程の距離を汽車まで歩いて行ってケイシーさん夫妻に会いました。

そのとき友だちがケイシーさんのリーディングのことを教えてくれましたが、私はエドガー・ケイシーさんのお父さんのことを言っているのだと思いました。

その一年後の 1923 年まで、リーディングをとっているのがエドガー・ケイシーさんだとは知りませんでした。

その頃私は、ティシエ・ハードウェア・カンパニーに速記者として務めていました。

大きな会社で、その地域の卸売りと小売を一手に引き受けていました。

店にはなんでもあってなんでも買えました。

お弁当も買えるし、乾物から衣料から雑貨までいろいろありました。

私はその会社のビルの真ん中にある事務所に勤務して、三人くらいの人の速記をとっていました。

私は会計士をつとめる事務部長の部屋にいました。

会社は鋤やらありとあらゆる種類の農耕機械を扱っていて、外回りのセールスマンもいました。

その会社の陶磁器を扱う部門に、ウィリー・グラハムという名前の女性がいました。私は2~3回事務所から彼女に連れ出されて、セールスマンが陶磁器の宣伝をしているホテルの一室について行ったことがありました。陶磁器の模様の話、コピーをつくるために私に速記させて・・・彼女が顧客に配るコピーも私が用意したのですけどね。

1923年の8月に私はグラハムさんの甥が病気で、ケイシーさんにリーディングを依頼してあるので一緒に来て速記をとってもらえないかと彼女に頼まれました。彼女の甥は、彼女のお兄さん夫婦とバーミンガムに住んでいました。ケイシーさんのスタジオは大通りに面した二階で、会社から通りを渡ってすぐのところでした。ケイシーさんは階段を上ったところで私たちを出迎えて、暗室の裏手にある小部屋に連れて行ってくれました。その部屋には、すでに何人もの人たちが座っていました。

彼は最初リーディング専用の寝台に座って私たちに少し話しをして、それから手を頭の後ろにして横になり、数分間天井を見ているだけでした。次に、リーディングを始める前ですが、手を太陽神経そうの上に移して組みました。いろいろな本に彼はリーディングを始める前にワイシャツのカラーやネクタイを緩めたと書いてありますが、でもその日はカラーなしのワイシャツでした。

お父さんのL.B.ケイシーさんがリーディングを誘導し、エドガー・ケイシーさんに話しかけ始めて暗示の言葉を口にしました。私は後から気がついたのですが、その暗示はケイシーさんの目がヒクヒク動き始めたときに言うことになっているようでした。ケイシーさんが深い呼吸をして、胸が上下に動きました。L.B.ケイシーさんが暗示の中で病気の少年のことを話し、その少年が今いる住所を告げると「そうだ。我々はその身体を捉えている」とケイシーさんが言って、リーディングが始まりました。

私は速記を取るのに忙しくて、変わった仕事をしているとは思いませんでした。いつもの仕事と同じでしたよ。(笑) そうそう、フロリダのタンパで大きな集会があって、スタディ・グループ部門の責任者のネイル・クレモントと一緒にいたときの事です。誰かが「初めてリーディングを見たときに、畏怖の念を覚えませんでしたか？」と聞いたのです。私は「いえ、別に」と答えました。リーディングは奇妙なことでも不自然なことでもなく、とても当たり前のことのように思えたという意味でした。そうしたらネイルに、「なんでまた？ 寝ながら速記させるボスなんて、そうそういないでしょうに？」

と言われましたよ。

後でわかったのですが、そのとき部屋にいた何人かは速記の仕事に応募してきた人たちで、ためしに速記していたのです。

後でリーディングの速記をみたケイシーさんは、私のものが一番良いと言って、その仕事をやってみてはどうかと勧めてくれました。

私はご機嫌だったのですが・・・後になって「なんてことなの、なんでケイシーさんに私の速記が良いってわかるのよ。

彼は速記のことを何も知らないじゃない。」ってね。(笑)

JW : 彼は速記が読めなかったのですか？

GDT : そうです。

その日は木曜で、午後でした。

グラハムさんはそれを普通の文章にタイプして、コピーを二部作って欲しいと言いました。

それから私は友だちにノートを読み聞かせて、「脊椎」とか「頸部」とか、私が聞いたことのない言葉のスペルを調べるのを彼女に手伝ってもらいました。

次の金曜日はいつものように会社に行って、リーディングをタイプしてコピーを二部つくりました。その日の午前中はそんなに忙しくなかったし、私はよく、何もすることがない時には手紙を書いていたのです。

仕事中にはたくさん手紙を書きましたよ。

ボスがたくさんいましたからね、私が誰に言われて何をしているのか誰も把握できないのですよ。

ともかくグラハムさんは、お昼休みにコピーを一部ケイシーさんに届けました。

帰ってくると彼女は、

「ケイシーさんがね、是非あなたに働いて欲しいって言っているわ。興味があるなら会ってみれば。」と言いました。それから

「あなたはケイシーさんのところで働くべきだって気がするわ。」と付け加えました。

疑問の余地はありませんでした。

自分がそうしたがっていることが分かりました。

飽き飽きしていたのですよ。

わかるでしょう？

前の年だってとても忙しくてね、何か違うことをしてみたかったけれど、それが何かはわからないという感じでした。

だから決めました。

JW : そして、それが生涯にわたる付き合いの始まりだったのですね。

トランス状態ではない時のエドガー・ケイシーはどんな人でしたか？
第一印象を聞かせてください。

GDT : いいな、と思いました。
すぐに好きになりました。
一緒にいて落ち着けました。
その頃の私は大人の人から、特に男の人から対等に扱われるということがありませんでした。
でもケイシーさんは私に対して目下の人間に話す感じではなくて、人間としての私に関心を持っているという感じでした。
誰に対してもケイシーさんはそうなのですけれどね。
彼はごく普通の人で、特に変わったところはありませんでした。
私は会社に退職願をだして、二週間後に辞めました。
そして1923年9月10日から、ケイシーさんのところで働き始めたのです。

ケイシーさんは最初に私に言いました。
「いいですか、グラディスさん・・・」初出勤の日だったと思いますよ。
「いいですか、グラディスさん、あなたは私のために働くのではなくて、私と一緒に働くのです。
それを忘れないで下さいね。」
万事その調子でしたね。

JW : ケイシーはリーディングのときに言ったことを覚えていなかったということですが、それはどうでしょう？

GDT : ええ、覚えていませんでしたね。

JW : リーディングが終わるとすぐに、自分が言ったことを知りたがりましたか？

GDT : いいえ、リーディングの内容に興味があるようには見えませんでした。
ライフ・リーディングを取り始めるようになってからですね、奥さんにリーディングを読み上げてもらってそれについて討論するようになったのは。
でも読んでほらっても、自分で読むことは殆どありませんでしたね。
そのあと何年もしてから、リーディングについてケイシーさんと話し合いたいと言って、人が尋ねてくるようになりました。
やって来てケイシーさんに話しをして、リーディングのことでわからないことを聞いていましたよね。
そんな時ケイシーさんは、その人たちが自分の事情を語るのを聞いていただけでした。

JW : あなたは長年リーディングに携わってきたわけですが、リーディングの源は何だと思えますか？

GDT : 最初の頃は、ただ受け入れているだけでした。

理解できないこともありました。

リーディングのようなものは見たことがなかったし、でも見たことのないものなんてたくさんありますよね。

それでも私たちは何年もの間ずっと、リーディングに鼓舞されていました。

私たちはファミリーで、結束していました。

私たちは自分の耳でリーディングを直接聞き、勇気をもらい、希望を新たにしました。

リーディングは全てでした。

けれどケイシーさんにはそうではなかった。

自分でリーディングを聞けませんでしたからね。

彼は私たちに話を聞くしかなかったのです。

ケイシーさんは「良いリーディングがとれたかね？」とかなんとか聞いたものでした。

何かすごい収穫があったときには、私たちがそれを話してあげるのです。

JW : では彼は、個人的に周囲の人々程にはリーディングから恩恵を受けていなかったのですか？

GDT : そうです。

聞いている方は、いつも励まされていたようなものでした。

《ワーク》に関するリーディングをとるようになってからは特にね。

スタディ・グループのリーディングは、激励そのものでした。

そこには人が自分自身を理解して、より良い人間になって、転生したこの人生でやり遂げようとしていることが出来るようになるためのものがあります。

ケイシーさんは、リーディングがどんな風にその人の役に立ったのかを聞くと勇気付けられるようでした。それがやりがいでした。

ケイシーさんはリーディングの仕事は神から与えられたものだと思っていたし、そうでもなければとっくに止めていたでしょう。

JW : 若い頃のケイシー氏は、自分を変人だと思っていたのですか？

GDT : そのようですね。

大人になる前の、思春期後半の十代のときには、実際に人から変人と言われたと話していましたね。

普通と違ったところがあったわけですから、自分でも変人だと思い始めたようですね。

後年人々はリーディングに助けられるようになって、やっと彼のしていることを信用するようになったのです。

リーディングによって人がどんな風に助けられたのか聞くことが、彼の救いになりました。

JW : グラディス、最初のライフ・リーディングと転生について、それからそれが与えられたときの様子について話していただけますか？

GDT : 最初のライフ・リーディングはオハイオ州デイトンでとられました。
セルマにアーサー・ラマーズが来たのは、私がケイシーさんに合流して一ヶ月も経っていない頃でした。
ラマーズはケイシーさんから感銘を受けて、また彼をデイトンに連れて行ったのです。
ケイシーさんは自分が留守の間に、私に古いリーディングを読んで聞かせるようにと奥さんに頼みました。
その頃は約 600 のリーディングのコピーが、アルファベット順のダンボール箱に名前でも整理されて入れられていただけでした。
いろいろな人がリーディングを記録していました。
初期の頃の多くのリーディングには、コピーもありませんでした。

ケイシーさんはラマーズさんに同行し、奥さんは私にリーディングを読みあげて、私はそれを書き取りました。
多分私のすることが無くなってしまうので、そうしてくれたのでしょうか。
私は聞いて書き取りましたよ。
それからケイシーさんの奥さんと話しました。
とても素晴らしい経験でした。
彼女は家族のこと、お二人の家庭の話もしてくれました。
二人が十代のときにどんな恋人どうしだったのかもね。
私はうっとりしてしまいましたよ。
私はラブストーリーが大好きで・・・ご存知でしょ？・・・十代のときには私はラブストーリーばかり読んでいて、男の子の方が死んでしまうのではないかと不安になったりして（笑）、でも好きでしたね。

ケイシーさんはデイトンから奥さんに手紙をよこしました。
彼女は私にも事情がわかるように、書いてあることを話してくれました。
ある日彼女は「エドガーが私たちにデイトンに来て欲しいと言っているの。
あなたに頼んでみてくれないかって言っているのだけれど、どうかしら？」と、私に聞きに来ました。
私は OK しました。迷う余地なんてありませんでした。

そうして私たちはデイトンに行きました。
着いて見ると、もうリーディングが取られていました。
アーサー・ラマーズは占星術に興味を持っていて、それについてリーディングがとれないかとケイシーに聞いていました。
そのリーディングは、いかにもケイシー・リーディングといった色合いのもので、ケイシーさんのことについても触れていました。
それには、「彼はかつて僧侶であった」とありました。

そのリーディングのあと、ラマーズさんや彼と一緒にいた中の何人かは自分がかつて誰だったのか知

るためのリーディングを希望しました。

エドガー・ケイシーはアーサー・ラマーズ、リンデン・シュロイヤー、ジョージ・クリングスミスのグループと、リーディングをとりました。

リーディングの中に、彼ら 4 人はトロイ時代に「破壊的な目的」のために一緒だったことがあり、今回は建設的な目的のために力を合わせなくてはならないとありました。

しかし結局のところは、魂を成長させるのではなく魂を見失ってしまったように思われます。

JW : エドガー・ケイシーはそのリーディングに、どう反応しましたか？

GDT : 本当に魅入られているみたいでしたよ。

でもそれが正しいという確信はなかったようです。

どうなんだろうと思っていたみたいです。

それでも私たちが到着したときには、そのリーディングの説明をしてくれました。

それから家族のリーディングを取り始めました。

ガートルードとまだ 5 歳だったエドガー・エバンス・ケイシー、それにセルマにいるヒュー・リンのです。

彼は学校があったのでまだセルマにいたのです。

そういえばヒュー・リンは講演会の壇上でね、デイトンに来てクリスマス・プレゼントにライフ・リーディングを貰ったときには心底ぞっとした、と話していましたね。

ヒュー・リンは自分のライフ・リーディングを全部読んでね、皆さんご存じでしょうけどケイシーに言いました。

「ねえ、これは父さんが僕らに日曜学校で教えていたことと違うじゃないか！」(笑)

それからケイシーさんは、私のライフ・リーディングを取ってあげようと言い出しました。

彼が人にリーディングを薦めるのは異例中の異例なのです。

誰かのリーディングを読みたいと思ったケイシーさんが、その人に薦めたことは何度かあったのですけどね。

JW : そのときのことですけれどね、グラディス、あなたのライフ・リーディングに何とあったのか教えていただけませんか？

GDT : 素敵なきがいくつかあってね、当たっていましたよ。

たとえば一つには「・・・人々から、この地上の次元における彼らのそのより美しい部分を、引き出すことになる人である・・・」

実際そうになりましたね。

人々というのはあなただってそうだし、ケイシーの《ワーク》にかかわる人たち皆そうじゃないですか。

素敵でしょ。

転生のことを聞いたときどう感じたかとよく聞かれますが、とにかく何もかもが私にとっては目新しいことでした。

そのときには、私の八番目の人生のライフ・リーディングが与えられました。

フランスでの生まれ変わりの影響で異性を信じないようになっている、と言われたときには、あたっていると思いましたよ。

それからナイフや刃物に対する恐怖もね。

それは私のペルシア時代の影響で、私はそのとき剣で刺された後、なかなか死にきれずに苦しみをぬいたのです。

この二つは当たっていると思いましたね。

私は男の子と二人きりでデートしたことがなかったのですよ。

デートといったら必ず友だちの女の子を誘って、彼女も誰か連れてきてダブル・デート。

ずっとそんな具合でしたね。

リーディングは納得できました。

私はとにかく誰かと二人きりになりたくなかったのです。(笑)

誰かと話していると必ずといってよいほど聞かれますけどね、男性不信はもう克服して随分になりますよ。

でもナイフはいまだに怖いですね。

JW : フィジカル・リーディングについて話してもらえませんか、グラディス？

たくさんとってもらったでしょうから、何か適当なのを一つ。

GDT : 頭痛に悩んだときがあって、メガネをかけていたのです。

二年間くらいメガネをかけていましたね。

医者には眼精疲労が原因だと言って、メガネを処方してくれたのです。

私はずっと天窓の真下で働いていましたが、天窓には色つきの日よけが入っていて私のデスクにその影が落ちるようになっていました。

私は別に気にしていませんでした。

医者はそのせいで目が疲れるのだと言いました。

いつもメガネをかけているように言ったのですよ、わかります？

そのあとデイトンに行きましたが、そこでも頭痛で、それでケイシーさんがリーディングを薦めてくれました。

リーディングで彼はすぐに「メガネを外しなさい。必要ありません。」と言いました。

いつかメガネが必要になるときに来るけれども、それはずっと先のことだとリーディングは言いました。

頭痛の原因は血行不良と姿勢が悪いせいだと言いました。

「真っ直ぐ座りなさい！」と言われましたよ。(笑)

だからね、前のめりになって仕事しないようにずっと気をつけていますよ。

それから首まわし運動と、バイオレット・レイを首から下とか、肩甲骨の間とかにあてることも薦められたので、その通りにしました。

メガネをとると、頭痛はすぐにおさまりました。

その後四十代の終わりになるまで、私は本当にメガネをかけずにすみました。

リーディングにも言われたように私は遠視でね、リーディング通りで左目の方が右より弱かったですね。

もう一回のフィジカル・リーディングは、歯医者に行ったあとのことでした。

歯医者で、扁桃腺が見たこともないほどひどい状態だと言われたのです。

これは出来るだけ早く取らないといけないとね、こわいでしょ。

それでリーディングをとりました。

リーディングは、扁桃腺はそこで大事な役割を果たしているのだから、取らない方がいいと言いました。

いつか取らなくてはならなくなるがそれはまだまだ先のことで、今は身体にとってゴミ箱のように必要なものだと言いました。

それは毒素が扁桃腺で除去されるからで、バージニアビーチに行くまで取りませんでした。

結局扁桃腺にトラブルが起こってそれを取ったのは、ケイシーさんが亡くなる二～三年前でした。

ケイシーさんは、「さあ、扁桃腺を取るときが来たよ。もう仕事がすんだんだ。だから取らないとね。」と言いました。

それですぐに扁桃腺をとりましたが、それから問題は全く起こっていません。

JW : エドガー・ケイシーは存命中、叩かれたことがありましたね。

時々辛い事があったでしょう。

ニューヨークでは逮捕され、それからデトロイトでもそうでした。

その頃のことを話していただけませんか？

GDT : デトロイトでは、資格がないのに薬を調合したとされて、そしてニューヨークでは占いをしたということで逮捕されました。

ニューヨークのときより、デトロイトのときの方が辛かったと思います。

ニューヨークのときには支援者が集まりましたからね。

友人たちやメンバーが沢山来てくれたのですよ。

私たちはホテルの一室で判決が出るのを待っていたのですが、皆がそこに集まってくれたのです。

JW : リーディングをとるのをやめようとはしなかったんですか？

GDT : ええ、考えもしませんでした。

人々が集まって、リーディングをやめてはならないと言ってくれましたから。

そして結局嫌疑も晴れました。
両方の事件の記録は全て保存してあります。

JW : 両方とも無実が確定してリーディングが続けられたのですね？

GDT : そうです、そうです。

JW : 1943年に『永遠のエドガー・ケイシー』が出版されましたよね、グラディス。
トーマス・サグラーは実際にケイシー家で暮らしていたのですね？

GDT : ええ、二年間同居しましたが、その前の1927年からケイシー家に頻繁に出入りするようになっていました。
ワシントン・リー大学でヒュー・リンと同じクラスだったのですが、一緒に帰省していましたよ。

JW : 『永遠のエドガー・ケイシー』の出版は、この《ワーク》にどんな影響をもたらしましたか？

GDT : たいへん良い影響がありました。
その本のおかげで、《ワーク》のことをよく理解する人々が沢山集まるようになりました。
その一方では、「バージニアビーチの奇跡の人」という記事が1943年9月号のコロネット誌に出ましたから、エドガー・ケイシーの秘書に電話一本入れさえすれば誰でも奇跡の予約が出来るのだと思われてしまってね、殺到した電話がすごかったですよ。

JW : 国中にたいへんな期待が巻き起こってしまったわけですね？

GDT : そうです。
ケイシーさんにもそれをどうやって処理したら良いのか、わかりませんでした。
亡くなったときには、二年先までびっしり予約が入っていましたよ。
ケイシーさんは病気になるし、皆さんは前金で現金を送ってくるので、結局私たちは1944年8月からは予約をすべて断らざるを得なくなりました。
彼が亡くなってから、お金はすべて依頼者に送り返しましたが、だいたい13,000ドルありました。

JW : ケイシー氏のリーディングでは、一日に二つ以上のリーディングをとってはいけないことになっていましたよね？

GDT : そうですが、彼はどうしても助けになりたかったのです。
ケイシー夫人がやめるように頼んだことがありましたが、ケイシーさんは「僕はやるんだ」と言いました。
一日二回リーディングどころか、その倍のリーディングをとりました。

一度のリーディングで1人の情報を探すだけでは足りず、5~6人の情報をとってきていました。

あるときなどは、7~8人分の情報を一度にとったりしました。

それはとんでもないことなのです。

彼は依頼の手紙を丹念に読んでいました。

全部の依頼に・・・郵便物の詰まった袋がいくつも届けられていたのですが・・・答えようとしていました。

手紙の山の前に座り込んで丹念に読んで、手紙の主たちに同情していました。

手紙はどれも、耐え難い状況を訴えるものばかりでした。

ケイシー夫人は「止めてちょうだい！」と懇願しました。

でもケイシーさんは「出来ないよ！ この人たちの助けになるんだ、続けるしかないんだ。」と言いました。

奥さんは、「こんなことを続けていたら、あなたはすぐに誰も助けられなくなるわ。」と言いました。

でもケイシーさんは、「分かっているよ。でも出来る限り続けたいんだ。それでおしまいでいい。」とケイシーさんは言いました。

そしてその通りになりました。

ヒュー・リンは海外にいました。

エドガー・エバンスも海外でした。

もしヒュー・リンが家にいたら、彼ならなんとかできたんじゃないかと思います。

ケイシーさんはヒュー・リンを頼りにしていましたからね。

JW : エドガー・ケイシーはリーディングの健康法には従わなかったのですか？

自分のことは構わなかったのですか？

GDT : 構いませんでしたね。

リーディングの言う通りにすることもありましたが、続きませんでしたね。

最後の頃のリーディングで、オステオパシーの療法を受けるように言われたのです。

週に三回のオステオパシーと何種類かの湿布と、他にもいろいろしなくてはならないと言われました。

でも戦争中でしょう。

車のガソリンがないんですよ。

それにノーフォークまで週に三回なんて・・・その頃バージニアビーチにはオステオパシーを受けられるところがありませんでしたからね・・・行ったり来たりだけで半日はかかるわけですから、もしガソリンがあったって出来ませんよ。

だってリーディングをとる時間がなくなってしまいますからね。

やらないというより、出来なかったんです。

彼は自分の意志で、リーディングを取れるだけ取り続けることを選んだのです。

JW : リーディングはいつまで取っていたのですか？

GDT : 8月の末までです。

もし軽い脳梗塞に気がつかなかったなら、その時も多分やめなかったと思います。

ケイシーさんは、エドガー・エバンズさんがケイシーさん用に買ったポータブルのタイプライターで手紙をうって、自分宛の手紙には全部返事を出していました。

ところがそれが、片手でしか打てなくなってしまったんです。

皆が彼に休んでくれるようにと頼みました。

オステオパシー医のヘンリー・ジョージ博士が、その年の総会のためにデラウェアのウェルミントンから来ていました。

彼がケイシーさんに休暇をとって静養に行くべきだと言って、それで、どこに行こうかとリーディングをとってみると、ロアノークを薦められました。

ケイシーさんはそこに行ったことがあって、そこが好きでした。

それで車でロアノークに行って、ホテルに滞在しました。

そしてリーディングのかわりに、しばらくのあいだその医者に診てもらおうということで、皆の意見が一致しました。

医者には医者のやり方で治療してくれました。

JW : 亡くなるときは、どんな様子でしたか？

GDT : 1944年の2月、彼はトム・サグラーに会いにフロリダに行きました。

バカンスのつもりでした。

ケイシーさんはとても楽しんだのですが、風邪を引いてしまいました。

インフルエンザのような症状で肺炎を起こし、心臓が肥大してしまいました。

サルファ剤が出た頃で、誰にでも処方されていました。

ケイシーさんはそれを使うことにしたのです。

昔からの友だちのウッドハウス先生がそのことを提案したのですが、後から先生はあの薬がよくなかったと言いました。

あのときのケイシーさんには、むしろ害になってしまったのです。

ヘンリー・ジョージ先生が、ケイシーさんをロアノークの病院に入院させて、治療が受けられるように手配しようとした。

けれどケイシーさんは入院したがりでませんでした。

ジョージ先生は私に、「もしケイシーさんを病院に連れて行くことができないのなら、病院をここに運んで来ればいい。」言いました。

それで病院用のベッドやら医療器具を用意しました。

ジョージ先生とウッドハウス先生は、サリー・ケイシーの兄弟のウォーラー・テイラー先生に電話をしました。

そしてこの三人の医師たちが協力して知恵をしぼり、ケイシーさんのために出来る限りのことをしました。

JW : ケイシー氏は、死に際に《ワーク》のことをどのように考えていましたか？
それについてリーディングで、すでに十分なアドバイスがあった、とお考えでしたか？

GDT : 《ワーク》のことはそんなに気にしていなかったと思いますよ。
ケイシーさんが一度ヒュー・リンに言ったことがありました。
ヒュー・リンは研究やリーディングの整理のことでいつも頭が一杯で焦っていたのですが、ケイシーさんはそれにいらいらして、「僕が死んだらそんなのはいくらでも出来るさ」と言ったのです。
それはケイシーさんの問題じゃありませんからねえ、そんなに気にしていなかったんですね。

JW : ケイシーさんの一番大きな業績は何だと思えますか、グラディス？
彼はあなたの人生に本当に大きな影響を与えた。
他の人々の人生にもね。
彼の影響は、最大の業績は、まずなんだと思われますか？

GDT : そうですね、思いつく限りで一番大きかったことは、人はみな自分の運命に責任を持っているということに気づかせてくれたことです。
私たちの全員が、それぞれ神と持っている絆について教えてくれました。
イエスについても理解させてくれたのと同じようにね。
彼のおかげで聖書に命が吹き込まれ、身近に感じられるようになりました。
人生について理解させてくれました。
その理解のない私の人生なんて今では考えられません。
他の大勢の人たちも同じだと思いますよ。

JW : しめくりに相応しい素晴らしいお話です。
あなたが魂の美德である優しさ、辛抱強さ、忍耐を沢山お持ちになっていること、とくにあなたがどれほど辛抱強いかということを、私たちは皆、実感しました。

GDT : 私のライフ・リーディングの最初にあったことを一つ言わせてくださいね。
「なかなか美しい魂だ。そしてかなり成長しているようだな。」

JW : ありがとうございます、グラディス。

<2006年7、8月号より>